［書評］

三谷惠子
『比較で読みとく　スラヴ語のしくみ』
（白水社、2016年、244ページ）

服部　文昭

1. さて、学術雑誌の書評欄には似つかわしくない「お詫び」、「お断り」から始めなければなりません。

或る日、編集委員長の大平陽一先生の一通のメールから、全てが始まったのです。私は、大平陽一先生に対して、その学識、人柄、何をとっても全幅の信頼を寄せています。しかし、今回のこの書評の担当者の選任は、明らかな「ミスキャスト」に相違ありません。千野栄一先生直伝の免許皆伝である大平先生ご自身か、スラヴのあちこちのフィールドで活きたスラヴ世界に触れつつ研鑽を積む若手の研究者たち（最近、ますます増えている気がして、頼もしく思います）にこそ、ふさわしい役回りでしょう。

遥か昔、本郷に非常勤講師で出講されていた千野先生が、ちょうどモスクワ大学から出たばかり（1977年）のСлавянские языкиという概説書を取り上げて、文字通り、精読されました。正規の受講者は私一人で、他には当時の福田千津子さんが聴講に来ていたと記憶します。大変に勉強になったのですが、スラヴ諸語に関わる私の素養は、その時点で止まっていて、その後のアップデートがありません。語弊を恐れずに喩えれば、ひょんなことからお医者さんになってしまった人が、まあ、人柄は悪くはないのでしょうが、最先端の医療などとは無縁に診察を続けている……、といった具合です。以下の書評も、そのような観点からご覧になって、ご寛容を賜れば幸いです。

2. 学術雑誌の書評の文として、このスタイルに「違和感」をお感じの方も多いかも知れません。実は、これは、対象となる著書の文体に合わせた（？）ものです。

出版元の白水社さんの企画方針であるのだと私は推測しているのですが、高校生や、勉強好きな中学生でも読んで分かるような、通読できる入門書を目指した本であり、著者の語り口も、それを踏まえた上で、選ばれたのだと思います。ただ単に語り口がソフトであるだけではなく、本書の構成にも、その企画の意図（見方を変えれば、制約）が見て取れます。それは、各々の項目が「見開き2ページ」で完結してい

るのです。「見開き 2 ページ」と言葉にすれば簡単そうですが、スラヴ諸語のもろもろの特徴を担う項目を「見開き 2 ページ」で、かつ分かり易く、説明するということは、実は、至難の業です。かつて、私も初級ロシア語の教科書の編集に関わらせて貰った経験がありますが、限られた字数で予備知識の無い読者に分かり易く説明することの難しさを実感しました。ましてや、ロシア語のみならず、スラヴ諸語です。私など、到底、及ぶ所ではありません。この見事な本は、著者の三谷先生の力量の為せる業としか言えません。

3. それでは、以下に、本書の構成を目次によって示します。

はじめに
印欧祖語から各言語へ
宗教と文字の分布
本書の表記について

第 1 部　文字と音のしくみ
1　文字のしくみ
1－1　スラヴ語とスラヴの文字
1－2　東スラヴ語のキリル文字
1－3　南スラヴ語のキリル文字
1－4　キリル文字の発祥
1－5　ラテン文字のスラヴ世界
コラム　スラヴ最古の文字―グラゴル文字
2　音のしくみ
2－1　音のしくみのしくみ
2－2　日本語そっくりのスラヴ語？
2－3　スラヴ語の「ャ・ュ・ョ」
2－4　母音のルーツをたどる（1）
2－5　母音のルーツをたどる（2）
2－6　要は単純な母音のしくみ
コラム　ウクライナ語の и、i、ї
3　子音のしくみ
3－1　子音のはじめは
3－2　ポーランド語の子音
3－3　ポーランド語の子音をさらに解体
3－4　チェコ語の ě と子音の関係
3－5　運命は口蓋化の有無にあり
コラム　ч・ц の起源
4　音のつながりと響きのしくみ
4－1　音節について
4－2　スラヴ語の音節
4－3　開音節語の運命
4－4　アクセントの特徴
4－5　アクセントの多様性
コラム　同じ音を表す 2 つの文字
コラム　アクセントと母音の変身

第 2 部　語のしくみ
1　名詞のしくみ
1－1　3 つの文法性
1－2　文法性の意味
1－3　数について
1－4　格の種類と働き
1－5　男性名詞の格変化
1－6　格変化のあれこれ
1－7　人・イキモノ・そのほか
1－8　双数について
コラム　数詞の「2」と双数形
2　代名詞のしくみ
2－1　代名詞の種類
2－2　人称代名詞のかたち
2－3　人称代名詞も格変化します
2－4　人称代名詞の昔と今
2－5　「彼」「彼女」が変化すると

2－6 「私の」「あなたの」「彼の」
2－7 「誰」と「何」のしくみ
コラム　数詞も変化します
3　形容詞のしくみ
3－1　スラヴ語の形容詞
3－2　冷たい変化
3－3　形容詞の 2 つの語尾
3－4　よりよいものの表現
3－5　最高のものには「ナイ」がつく
コラム 「1」は形容詞
4　動詞のしくみ
4－1　動詞のつくり
4－2　法のカテゴリー
4－3　動詞の現在形
4－4　語幹と語尾のくっつき方
コラム 「自分」のついた動詞
4－5　be 動詞の現在形
4－6　過去形はシンプルです
4－7　未来の話
4－8　アスペクトについて
4－9 「体」という文法特徴
4－10　未来形とアスペクト
4－11　受動分詞について
4－12　命令と仮定
コラム　ブルガリア語の動詞について

語形成のはなし
その 1　ゴケイセイの基本要素
その 2　名詞の派生
その 3　形容詞の作り方
その 4　名詞・形容詞のいろいろな形成
その 5　動詞の派生
その 6　接尾辞による動詞の派生
コラム 「11」と「12」
コラム　20・30・40・90

第 3 部　文のしくみ
1　文のしくみ
1－1　文の基本的な特徴
1－2　疑問を解決する方法
1－3　肯定文と否定文
1－4　基本的な語順
1－5　主語がなくてよい文
1－6　再帰動詞も無人称になります
コラム　接語の並び方
2 「である」「ある」「ない」のしくみ
2－1　be 動詞の意義
2－2 「である」の過去と未来
2－3 「ある」の言い方
2－4 「ある」の過去と未来
2－5 「ない」の言い方
2－6 「ない」が過去になったら
コラム　順序を表す数詞
3 「てにをは」を作るしくみ
3－1　主格と対格
3－2　所有と部分を表す生格
3－3　否定文の生格
3－4　与格の使い方
3－5 「で」と「と」の造格
3－6 「に」と「へ」のちがい
3－7 「まで」や「から」を表すには
コラム　格のない言語の格
コラム　ペンタゴンと「5」
4　時と出来事のしくみ
4－1　体のつくりのおさらい
4－2　完了体の特徴と使い方
4－3　不完了体の特徴と使い方
4－4　移動を表す動詞
4－5　さまざまな「行く」
4－6　移動動詞と体
コラム　スラヴ語の時制形
5　伝えるしくみ
5－1　文の中の文
5－2　南スラヴ語の「文の中の文」
5－3　関係節を含む文
5－4　文をつなぐ方法

5－5　時間的関係を表すには
5－6　仮想世界の話
5－7「ために」の言い方
5－8　言い訳の構文
コラム　ブルガリア語・マケドニア語の冠詞
各言語のアルファベット
学習書ガイド

以上のようになります。

244 ページという極めて限られた紙幅の中に、スラヴ諸語の言語構造を知る上での必要にして十分な情報が網羅的に、かつ、分かり易い言葉で説明されているのです。取り上げられている諸項目が極めて妥当なものであることを確認するために、比較的最近の類書（Sussex, R. and Cubberley, P. 2006. *The Slavic Languages*. Cambridge: Cambridge University Press）の主見出しと比べてみましょう。

0 Introduction
1 Linguistic evolution, genetic affiliation and classification
2 Socio-historical evolution
3 Phonology
4 Morphophonology
5 Morphology: inflexion
6 Syntactic categories and morphosyntax
7 Sentence structure
8 Word formation
9 Lexis
10 Dialects
11 Sociolinguistic issues

こちらは、本文だけで 638 ページもあって、版型もほぼ二倍の大きさです。ご覧になって分かるように、三谷さんの本は、小さいながらも、0 Introduction の部分から 8 Word formation にいたるまでの内容はカバーしています。何よりのポイントは、平易な言葉で書かれ、そして高校生でも「通読」が可能であるという点にあります。ケンブリッジ大学からの本は、私でも「通読」するのは難儀です。

4. 少しだけ、具体的な内容に触れてみます。

本書では、或る子音が palatalization を生じるか否かをメルクマールとしてスラヴ諸語の構造に切り込んでゆきます。このことの重要さは、スラヴの言葉を少しでもかじれば、たとえばポーランド語などでも、身にしみて理解できます。或る単語が、どう

して、このようなスペリングになるのか、もろもろの語形変化で、なぜ、このような《文字化け》が出てくるのか、等々の疑問の解消には、この現象の理解が必須です。本書では、限られたページ数の中で、かなりのスペースをこのテーマに割り当てて、理解の手助けにしています。

もちろん、極めて込み入ったテーマですから、その説明に様々な困難が伴います。繰り返して、よく読めば分かるのですが、「口蓋化をともなう母音」であるとか、母音文字の左肩に小さな「上付き文字」のヨットを添えられたりすると、最初は戸惑います。この点は、神山孝夫氏のような表記の方が分かり易い気がします（神山孝夫、2012、『ロシア語音声概説』、研究社、113 ページ参照）。ついでながら、ロシア文字щの説明も、私が「モスクワ中心主義」に毒されているのかも知れませんが、あまり一般的なものとは思えませんでした。

本書では、いろいろなことがとても入念に記述されていて、一例を挙げれば、ポーランド語の y の発音などです。外国では、たとえばロシアで出た教科書レベルの本でも、「半狭前舌母音でエとイの中間である」などと解説されています。一方、日本で一般に流布している説明では、相変わらず、「ウとイの中間」のような書き方です。狭母音ではありませんから、本書のような記述の方が正確でしょう。ウクライナ語のことも同様です。もっとも、ウクライナ語に関しては、山本富啓さんがきちんと記述していますが（たとえば、『言語学大辞典セレクション　ヨーロッパの言語』、三省堂、1998 を参照）、さすがは山本さんだと、しみじみと思いました。

一方、「高校生でも通読が出来る本」を目指す際には、余り細部にこだわると、「諸刃の剣」ともなりかねません。二、三の例を挙げますと、ポーランド語の sz とロシア語のшで普通に表される音の区別などもそうかも知れません。また、本書 29 ページで説明される、中舌の半広母音の記号ですが、どうもよく分かりません（東京外国語大学のウエブ上の IPA の解説も参考に見てみましたが）。このほか、63 ページのкнигаでの a は、最も弱まった発音ですし、同じページの「日本」で、語末の無力点のяは、いわば、「例外の例外」的な扱いになることが普通だと思われます。

5. 上にも紹介しましたように、本書はとても分かり易く書かれていますので、私でも通読が出来ました。そして、「目からうろこ」で、本当に勉強にもなりました。

しかしながら、冒頭でもお断りしたように、私は本書の「書評子」としての力には欠けており、特に、「代名詞のしくみ」以降は、まったく私の及ぶところではありません。ここから先は、大平委員長自らか、あるいは、スラヴのフィールドで鍛えられてきた若手の方々に、「引き継ぎ」たいと考えています。

ただ、通読した証に、もう一箇所だけ、後の方からコメントをします。216 ページと 217 ページに OCS の引用があります。冒頭の一例には出典（『マリア写本』）が書

かれていますが、しかし、二つ目の例では出ていません。前の出典と同じだと読者から誤解されたら、ここは困る例文です。なぜならば、『マリア写本』と『ゾグラフォス写本』とで読みが異なるからです。ちなみに、二つ目の例文は、『マリア写本』の読みではありません。私の手許の刊本では、ここで問題にされる語形をжとフロント・イェルで終わる別の形で示しています。ついでに申せば、216ページの第一の例ではアオリストの一人称単数形が問題にされていますので、「ヤッチ」を綴らなければなりません（ミスプリントや、表を作る際などの、いわゆる「コピペ」による誤記なども、まま、見られます。しかし、セリシチェフの《Старославянский язык》も誤植の多い本ですが、その名著であることを疑う人は誰もいません）。

OCSの話題が出ましたので、そのついでに、20ページの「キリル文字の発祥」に関わる質問を最後に。本書には、「おそらく10世紀末頃のブルガリアが発祥の地だろう」と述べられています。私にはブルガリアのバイアスが強すぎるのかも知れませんが、9世紀の末、シメオン帝の頃には使われていたと確信しますし、ブルガリアには何事も厳しかった千野先生でさえ、グラゴール文字と約50年の差（910年くらいの誕生）だと述べています。「10世紀末頃」というのは、どうなのでしょうか？

＊　＊　＊　＊　＊　＊

冒頭で千野先生のお名前を出しましたので、最後にもやはり千野先生のお名前を出して、この文を終わりにします。

1992年でしたか、千野先生が私の顔の前で何かを振り回して、「服部君、出たねぇ。こういうのが尊いのだ。「論文」といわれるヤツの10本分くらいの価値があるんだ」と、おっしゃいました。その何かは、ナウカの『窓』で、そこには本書の著者の三谷先生の「ソルブについて」という文章が掲載されていたのです。「アウトリーチ」などという言葉が喧伝される遥か以前から、千野先生は広い視野で、かつ、遠くを見据えていたのですが、今回、書評の対象となった本書も、いわゆる「学術書」、「専門書」ではないかも知れませんが、日本のスラヴ研究にとって大きな価値のある名著であるとお伝えしたいと思います。